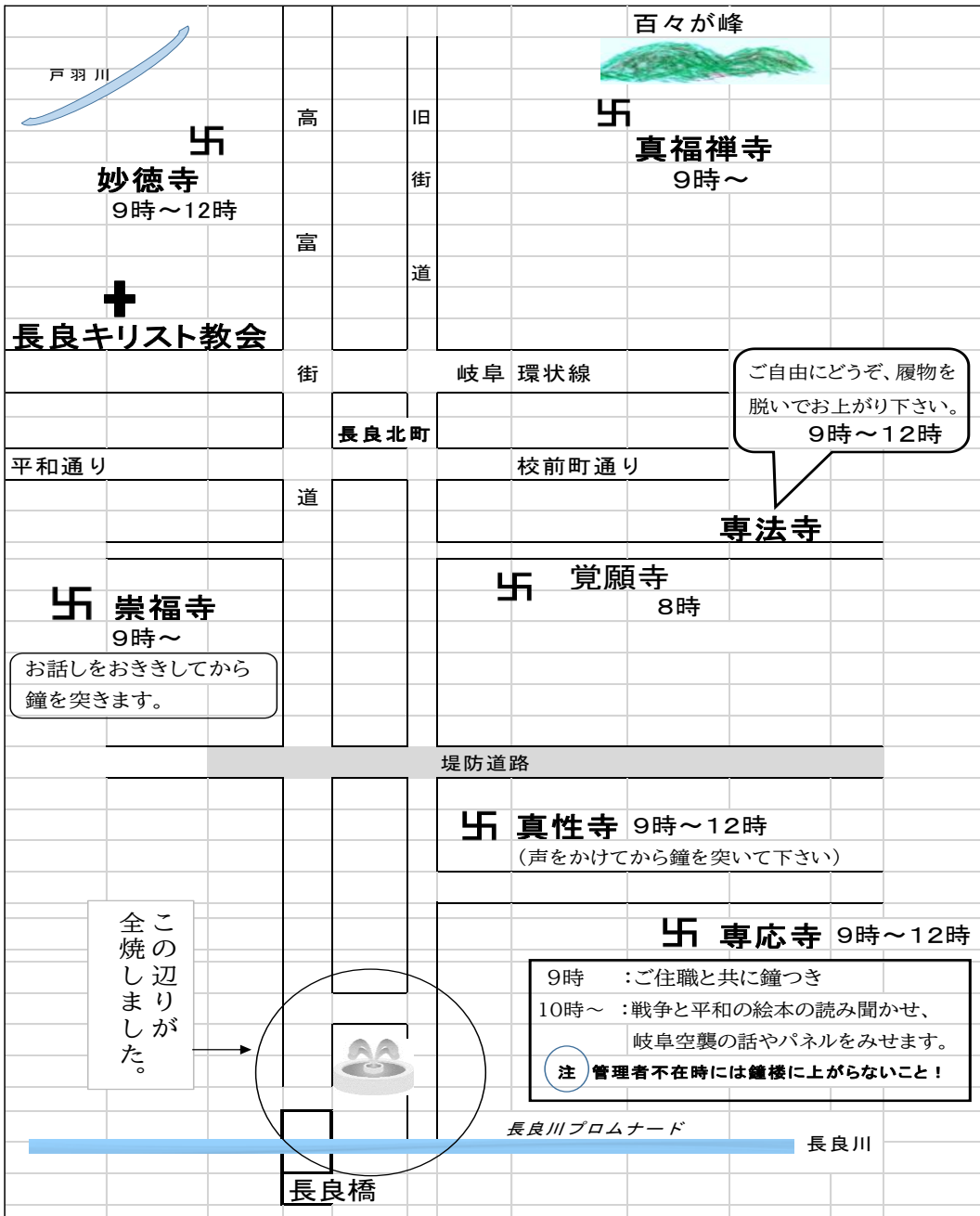


「岐阜空襲の日の事」 上野芙美

私は小学校三年生のとき寺島町から美園町に引越して梅林小学校に転校しました。七月九日の夜、空襲警報のサイレンで、町内の人たちが私の家に集まってきて皆で西の方を見ていると、柳ヶ瀬の辺りへ飛行機が群がって飛んできて爆弾を落とすのを見えました。すると真っ赤な炎が立ち上がりました。町内で昨日掘ったばかりの防空壕に逃げ込みました。家の縁の下にも防空壕を掘ってありましたが、そこに入っていたら焼け死ぬところでした。町内の防空壕にはまだ屋根が出来ていなかったので、父が私たちが伏せているところへ家から布団をもってきて上から投げました。爆弾が落ちる度に自分の背中やお尻の上に落ちた感じがしました。火が西からも東からも迫ってきました。火は風を呼んで暴風のようにでした。私たち家族は山に逃げました。朝になって家に戻ると焼けて何もありませんでした。田舎から祖母が握り飯をもってきてくれました。父母は焼け跡の整理をしていました。私は一才の弟を背負って祖母と一緒に四キロ程ある田舎へ歩いて行きました。真っ赤に焼けた電線をまたいで歩きました。あちこの蔵から炎が建ち上がっていました。直撃弾で前にいた家の隣の銭湯では三人がなくなったと聞きました。



岐阜空襲とは一九四五年（昭和二十年）七月九日夜から翌十日の未明にかけてアメリカ軍の爆撃機B29による焼夷弾攻撃で岐阜市街地のほとんどが焦土と化し、九百名近い死者を出しました。長良では旧長良橋北詰西側一帯が全焼したのでした。